

東南アジアの現状に立ちて

——民族課題への回顧と展望——

栗 田 有 康

目 次

1. はじめに
2. 政情流動の原点観
3. 二重言語の二重文化
4. 台湾と沖縄の或る焦点
5. 東南アジアと日本の役割
6. む す び

1. はじめに

およそ一国の情勢を捉えるに当たって、その目はいろいろにあるであろう。写真のように写してくる目、一つの課題に深く焦点を置いていく目、そしてまだ見えざるものを見る目すらあるであろう。短い日程の旅であったその自分の目、それはどういった働きのものであったか、読者の判断と批判を待つばかりである。

東南アジア諸国と言えば、十数ヶ国はあり、その情勢観察というからには、かなりの国を廻って来るのが本当であったろう。短い日程、そして僅かな範囲。けれど実感として自分の言い得ることは、そのどの小地区においてすら一国の問題が介在し、そのどの一国においてすら全アジアの問題が内在しているということである。自分としてはアジア的問題のパターンを捉えようとした旅行なのであったが、この一小文になんらかその成果を見せているとすれば、私としては更に調査研究へ踏みだして行きたいほどの意欲にもなるであろう。重ねて私の実観であるが、東南アジア諸国の深刻な問題点は、直ちに日本のそれでもあろうという、

東南アジアの現状に立ちて

この悲願である。それは全体的に見て、相互に共通した点があるということと、また全体の総観というよりは、一局面にできるだけ深く向い、その得たものを全体に投影してみれば、そこから問題解決への方向観を得て行くのではないかと考えたからである。それは一つの冒険であるかもしれないが、多くの識者が多様な角度から、東南アジアの問題を取扱ってしかるべきであろう。特に、アジアの一員である日本は、この問題をわが問題とまでに、真剣に取り組む価値と必要があると思われるので、あえてこの一小文を試みたわけである。

2. 政情流動の原点観

東南アジアは揺れ動いている。それは近代化への躍動と受けとることもできるが、様々な危機を孕んでいる点から言うなら、世界がそこにも見せている火山帯の一つと称してもよいであろう。つまり、東南アジア火山帯というわけである。そこに根深く燃えている火炎、それは久しきに亘る植民地時代の残存勢力、社会主義化への急速な転換をねらう左翼勢力、ナショナリズムを以ってする新興勢力、多極化した異民勢力、異宗教間に見る対抗勢力、貧富の落差と排外感情における社会勢力、政治権力をめぐる派閥勢力、青年層の批判と行動の勢力、都市と農村との背反勢力、などの連鎖錯綜現象である。例えば、インドシナー角においても、ベトナム、ラオス、カンボジア、に見られる国内での戦闘状態は、その地帯における諸勢力間の最も深刻な爆発的現象であろう。その他、今にも爆発しそうな国とか、小衡状態を保っている国とかあるが、そのエネルギーの向け方は一斉に民族の独立という至上の悲願に他ならない。確かに各国共、第二次大戦後、植民地支配からは独立した形になっている。しかしそれは到底完璧を期したのではなく、現にアメリカのテコ入れとは言うが、旧体制に戻ってしまうような結果をも見せている。その結果、旧植民地的な残存勢力の払拭と、経済的な自立、社会の民主化ということが、国民の底辺から起ってきたわけである。それが解放戦戦とか、愛国戦線とか自称して、各国でその政権相手にゲリラ活動にまで踏み切って、いつでもいぶっているといった状態を露出している。しかし、現実

東南アジアの現状に立ちて

に貧富の差の甚だしいことは、悲惨な絵図そのものであり、官僚群の汚職の程度たるや、大手術を要する癌にすら見られる。しかも、およそ民主化とは程遠い悪質な選挙違反や妨害さえ横行しており、これで国情安定などと、誰が言えるであろうか。ここで、フィリピンをその一例にとってみよう。できるだけ私の見聞したことだけに絞って述べていくことにする。

昔はスペインの支配下にあり、それからアメリカの支配下に移り、第二次大戦中は日本軍の征圧下に生き、戦後アメリカから独立の容認を得たという歴史を持つ。このようにフィリピン自体がアジアのどの国の歴史をもそのまま写している訳であって、民族が虚無に追いやられて来たこと、それは日本植民地政策下にあった朝鮮を憶わせるに足るものがある。例えば、工業化が極めて遅れていることから、当然かくあるべき産業革命への方向観は皆無に近いと言わざるを得ない。これを全般的に見るとき、国民とは一群の労働者でもあり、そしてその名にふさわしく、生活状態やその意識が極めて貧しさにしみているのである。まずこうした情勢を頭に画きながら、都会の姿を望見していこう。

マニラ湾に面した通りには近代的な高層建築が並んでいるが、その裏に少し入って行けば、でこぼこ道に面した貧しい家々が並んでいる。通りにはポンコツ寸前のタクシー、ジープを改良した簡易乗合バスであるジープニイ、おんほろバスなど市民の足である乗物が排気ガスをたんとして走っている。タクシーの安さは、この国の給与所得の低さを示す簡単なバロメーターになろう。夜になると街中でも本当に暗い。メイン・ストリートでさえ、やっと外燈がぼつぼつ出来上ってきている程度である。聞くところによると、電気代は大変高価なのだそう。暗いせいもあって、夜の街は物騒である。物騒なことは現在でも治安が維持されていないためであって、それは商店の様子から察することができる。大きな商店などでは、各自ガードマンを雇っていて、必ず拳銃を携帯し、入口のところで番をしている。これは警察力に頼れないための金持の自衛というわけである。ガードマンが雇えないような小さな駄菓子屋とか商店は、金網のようなものを店の前に張り巡ぐらしたり、手だけが中に入るように柵を打ちつけたりして、不慮の盗

東南アジアの現状に立ちて

難を防いでいる。これはこの国の無秩序ぶりを示すものである。このような状態から、終戦後間もない頃の日本が思い出された。裏街というか、都会の片隅には貧民街が展開し、沢山の子供達がほとんど裸に近いかっこうで遊んでいる姿など、まさに日本の20年程前の状態と言える。

交叉点のような車の一時止まるところでは、新聞を売る少年達が寄って来る。歩道ではあちこちの隅にタバコを売る女達が坐っている。彼女達はタバコを一箱単位ではなく、バラでも売る。ということは一時に一箱買えない人が大勢いるということなのだ。ぶらぶらしている若者もかなり目につくが、彼らは職がないのだそうだ。このような状態であるから、物騒なものも当然と言える。国民の大多数は貧しい暮らしをしているのであるが、それがほとんど改良されていない。一部の者達は相変らずものすごく豪勢な生活をしているのである。

ある中国系のR氏の邸宅をのぞいてみよう。彼は手広く企業を営んでいるブルジョアの一人とでも言ったらいだろう。大きな邸宅に住み、純粹のフィリピン人を何人も召使に抱え、立派なプールを持っている。女達は子供の世話など一切しない。全部召使がやってくれるので、彼女達は生みっぱなしである。家の中には一つの値がどれほどするが分からぬほどの骨董品を数多く陣列して、その力を誇示している。選びぬいた木材、こりにこった建て方、取り寄せた庭木・庭石、その上見晴しのよい高台に立っているといった、まさに夢のような暮しである。

このように貧乏人と金持との間には、余りにも落差がありすぎる事が知られる。この国の工業化未発達な状態からして、社会全般の安定勢力を成すべきはずの中流階級というもの、ほとんど無きに等しいのではなかろうか。国民の過半数を占める農民も、貧しいことに変わりがない。地方をまわってみると、農業の技術面は旧態以然のものであることが分る。水牛に鋤を引かせて田を耕しており、機械化したような面はまったく見られなかった。お粗末な堀立小屋のような家屋が並び、湿地帯とでもいったらよいような、土地の低い、一雨降れば何日も水が引かないようなところに、1メートルぐらい床を高くして立っている。見ていてとてもやりきれない気持になる。

東南アジアの現状に立ちて

この貧富の落差のはげしさは、東南アジアの多くの国に共通するものがあるだろう。その原因となるのが、植民地政策の延長であり、大地主やブルジョア階級が以然として力を持っているということである。政治家もこの階級の者がほとんどを占めていると言えるのだ。従って、社会の民主化、農地改革などにより人心の安定をはかるといふことより、私利私欲に走る方が多いということになる。フィリピンもこの例にもれない。そこから、政治家と国民の間に深い断層が生じていることも知っておく必要がある。つまり、政治不信、政治家不信である。直接、市民からは更に進んで無気力、無関心にまでなってしまうのを知ることができる（8月21日に起ったテロ事件のその後のことを報じた8月31日の読売新聞の記事は、そのことにも触れていて、大変興味がある。——100人の死傷者を出した血の野党集会をきっかけに、フィリピンは23日以来「準非常事態」下にある。人身保護令停止による逮捕状なしの徹底した共産党員狩り、血の集会の本当の“下手人”をめぐる大統領と野党書記長の名ざしの非難合戦——確かに表面上はマルコス政権発足以来の“危機”といえるが、この危機の特徴は、一つにはマルコス大統領のきわめて強硬な姿勢であり、また民衆の無気味なまでの冷淡さだ。「しょせん金持同士のけんかさ」とつぶやく市民の態度は、流血のデモが荒れたさる1月とは対照的で、むしろ国民の政治不信、政治家不信こそ最大の危機的要因といえるかも知れない。……事件の発端はともあれ、事件を最も有効に利用しているのはマルコス大統領だということは間違いない。……所得格差、外国資本支配からの脱出という問題の解決は、いぜんとして進んでいるとは思われない。そこへこんどの“雲の上の政争”となつては、1月デモで燃え上った民衆も、もはやあきれ顔という感がする。アキノ氏にいわせれば、マルコス大統領は「東洋一の大金持に成り上った」人物だそうだが、当のアキノ氏はといえば私兵400人、膨大な不動産と自家用飛行機を持つ大金持。一方、国民の6割までが年間所得20万円以下とあつては、国民はどちらが勝とうと関係ないと思つても不思議ではない。

アメリカは自国の利益のために、フィリピンという国を、勝手気儘に操ってきたと言える。その手段として使ったのが一部特権階級なのであった。アメリカの巧みな介入の例として、フィリピン憲法の中の「平等条項」や、貿易協定、軍事協定を上げることができる。これらは少しずつ改善されてきているにしても、民

東南アジアの現状に立ちて

族意識が盛り上ってきた若者達を中心となって、屈辱感を表面に出した抗議運動が起っても当然と言える。フィリピン大学などで、英語排折運動が起ったのがその良い例である。ナショナリズムの抬頭は世界の風潮であり、フィリピンもその空気はある。しかし、なにしろ自国の資本が極めて貧弱で、外国資本、特にアメリカの援助に頼らざるを得ないのが現状であり、民族の独立運動も気迫に欠けるきらいがあるようだ。ともかく、この国はアメリカ製品が氾濫している。タバコから衣類、食品から雑誌、それにテレビ番組まで、小さなアメリカといったところである。ハワイのようにアメリカの州の一つになっていればよかったという人達もいるそうだが、現状から見て、そのような考え方の出ることも分かる。

以上のことから、フィリピンに必要なことは経済的自立である。これこそ今後の課題として、一番考えなければならないことだろう。外国資本に依存している現状では、いつまでたっても植地的な状態を脱し得ない。それにはアメリカ、西ドイツ、日本など資本力のある国が、今までのような考え方を捨て、紐のつかない援助をすることである。このことは東南アジア各国、広く、アジア各国にも共通して言えることであり、世界の平和に結びつく。

3. 二重言語の二重文化

東南アジア各国の歴史が、アメリカ、イギリス、フランス等の植地の歴史であって、戦後はアメリカの援助を受けている国がほとんどであるから、母国語以外に、外来語が非常に大きな役割を持つようになったという現象が生じたのも当然と言える。やはり、フィリピンを例にとってみよう。

戦後アメリカの植地から独立したものの、対米依存度が大変強いのは、すでに見てきた通りである。現在の状態ではアメリカから完全に引き離すのはとてもできない。ことごとくアメリカナイズされてしまっていると言っても良いぐらいであり、ここに英語の比重がとても大きなことも当然理解できる。英語は第二の母国語となっている。言うまでもなく、フィリピンの言語はタガログであり、一般大衆はもっぱらこの言葉を使っているが、上流階級では英語の方が主として使

東南アジアの現状に立ちて

われているように思えた。もちろん、学校では英語を外国語として教えていたが、その実用度というか、重要性から、小学校一年から教えていたのであった。私が見学した Far Eastern University の附属小学校では、日本の中学一年生に対するようなやり方で、つまりオーラル・メソッドで一年生から英語を教え、三年生ぐらいから、ブースを使ったりして、耳と口の練習を徹底的にやっていた。このような教え方はプラクティカルな英語に重点を置いているのであって、英語が社会で重要な働きをしていることを示すものである。極端な言い方をすれば、英語なくしてはフィリピンもないとさえ言えそうである。こんなところにも英語排斥運動の一端があるのだと思うが、ここで問題になるのは、民族意識、ないしは民族文化と英語の関係である。

このことは東南アジア各国、広く、アジア各国に共通する問題であり、各国文化の自主開発や、社会意識への反省とそのレベルアップに言語の及ぼす影響力は大きなものがある。しかるに多少事情は異なるにしろ、母国語の普及度や、文学や詩などの言語芸術の発展性があまり見られないとなると、民族文化は停止もしくは後退の兆であると言わざるをえない。そこにますます先進国言語の介入が至上性を帯び、不可欠となってくると、政治面、経済面、社会面の性格づけにまで影響を及ぼすことにもなろう。つまり、民族文化なり、民族意識の固有性、基本性、不可欠性、権威性を犯すという今日の事態では、国家としての独立観を薄弱なものにしてゆくと考えられるからである。

タガログと英語の関係から、一般論として発展させていったのであるが、フィリピンにおいて、ごく一般的な現象として見た時、言語の上の劣等感のようなものが、国民の心の深部にあるように感じられた。これはホワイトの優越性を黙認しているわけで、決して自国の利点とはならない。ここに言語と民族意識、ないしは民族文化の問題が浮び上ってくるわけである。今後の課題としては、外国語の良い点を取り入れながら、母国語ならではの特徴を生かし、特にその固有の生活感覚による発想法によって、外来語に対し一方には批判的態度を取り、又他方にはこれを置き換える努力をすべきだと思う。文化・思想の培養力があり、伝達

力のある母国語にその充実を期すべきであって、そうなれば必然的に民族意識は高まり、民族文化も発展の方向へ進むであろう。

4. 台湾と沖縄の或る焦点

台湾と沖縄は東南アジアの中にあって、それぞれ特異な存在をなしている。周知のように、台湾は現在でも戦時体制を取っており、なにもかも反共一辺倒である。聞くとくところでは国家予算の85パーセントが軍事費に削れているそうであるから、国民がかなりいろいろな面で抑えつけられていることになる。しかし、挙国一致ということで、国家の目がうるさいのだろう、欲求不満がなにかの形で出ているといった面は見られなかった。それは長い戦時体制に慢性化したとしか言いようがない。慢性戦時中毒性とも言えようか、彼らの欲求不満は諦らめとなって、そのまま沈滞してしまっているように思われた。

軍事過重の歪みは、幾つかの面からはっきりと見てとれた。台北市の中で見ておくべき個所として紹介された中の動物園と児童楽園（遊園地）の貧弱なことは、子供達にとって大変気の毒な気がしたが、挙国一致であれば仕方がない。

このような国情であるから、民族文化といっても旧来のものをそのまま存続させているだけで、新しい文化の創造といった活動はほとんど見られない。このことは別の面からも言える。あの大きくて立派な故宮博物館と見事な数多くの展示物、またわれわれには華美に感じられるが、その彫刻と色彩の素晴らしい天公廟や竜山寺、これらは過去の遺物や遺品であって、その保存・管理も重要であるかもしれないが、それと同時にあるべきはずの近代的民族文化・芸術が私の目に入ってこなかった。このようなものを生み出す、いろんな意味のゆとりがないわけであろう。これも仕方がないことであるが、このままだと台湾は老化現象を起し、立ち直る機会を逸して、他の東南アジアの若い力に、あらゆるリーダーシップを握られてしまうと危まれる。

夜の西門庁あたりの活況を見ると、消費生活も華かであり、戦時中であるということを瞬間忘れてしまいそうになる。国民は平和を望んでいることに疑いはな

東南アジアの現状に立ちて

い。世界の動きが、次第に台湾人の在り方を孤立化や疎外化に追いやっていくように思えるのであるが、この打開の道こそ唯一つ、即ち、過去のこだわりを捨て、台湾人意識より中国人意識へと大きく飛躍すべき方向を探知し、その実現への道に踏み出すべきではあるまいか。全台湾あげて。それが時代の本命であると言わざるを得ない。

台湾の原住民と、中国大陸から渡って来た人達との間に、支配者と被支配者のような関係が見られることは、無視するわけにはいかない。現在の台湾で、名誉ある地位というか、社会的に高い地位についている人達は、中国から渡って来た人達であり、本来の台湾人は決してそのような地位につくことはできないということである。このことは「言葉」の上から、はっきりと裏づけられる。現在の台湾の言葉は北京語であり、台湾語はだんだん廃れていっている。現在ではまったく知らない人も多いらしい。その理由は、なによりもまず使われないからである。この差別に不満を持っている人も多いらしいが、結局は諦めている。「長いものには巻かれろ」とでも言うか、「泣く子と地頭には勝てない」といった心境らしい。現在の台湾に自由・平等はない、と言ってしまえばそれまでだが、それではその言語を以って生きる人間社会の没落を意味する以外のなに物でもないであろう。このままで済まされるはずのものではないのである。

中共に対する防衛ラインとして、沖縄と共に台湾は重要な存在であった。しかし、世界情勢の刻々たる変化と、これに応じたニクソンの中共訪問を発表して以来、強引なそうした政治姿勢や、その価値感も薄れてきていると言える。それが世界の与論であり、台湾自身にとっても、この現実はどうにもならぬであろうと思う。あまりにも依怙地になると、本当に孤立して、立枯になるか、もっと不詳な事態になってしまうかもしれない。国際与論の動向と、台湾自身の受け取り方が、台湾にとっての大きな宿命的課題と言わざるを得ない。

沖縄は日本の一部であり、日本人はそれだからいっそう沖縄を理解していなければならない。しかるに、沖縄を基地の島であるという以外に、どれだけのこと

東南アジアの現状に立ちて

を本土の国民は知っているであろうか。72年返還が決った現在、沖縄のことをより深く理解する必要がある。

まさに沖縄は大きな基地であるといったことは、中北部をぐるっと廻っただけで、はっきり実感として受け取れる。嘉手納基地の馬鹿でかき、それに米軍専用の海水浴場（8月12日の読売新聞に「オキナワの夏、金網越しの海」という見出しで、大きな写真と共に興味ある記事が載っていた。——金網の向こうに、もう一つの夏と、別天地の海があった。小粒の水晶を散りばめたような白砂の浜べで、ビキニとサングラスの将校夫人が、白いハグを焼く。底まですき通って見える真青な海では、ベトナム帰休兵が、陽気な声を張り上げて熱帯魚を手づかみにしようと波しぶきをてる。沖縄本島中央部の屋嘉ビーチ。同じ金武湾内にある毒ガス輸送の天願棧橋まで、約10キロ。太平洋側の東海岸で、ハワイのワイキキにも似た美しい海浜と見れば、ほとんど例外なく“米軍専用”だ。日本人は金網のすぐそばのガードボックスで銃を肩に監視の目を光らす特別警備隊員と、砂浜のゴミをたんねんに拾う清掃作業員だけ。地元の子どもたちが、ずっと離れた岩場で、声をひそめるようにして水とたわむれていた。来年は、遠くからかい間見していたこの金網越しの海が帰ってくる。しかし、それもたったの16%だけだという）や、ゴルフ場もあった。これらは今だに戦勝国と敗戦国の関係を示すものである。ともすれば、これが態度や行動となって出てくるために、住民との摩擦が起るわけである。アメリカは戦勝国者として臨み、沖縄を基地としてのみしか価値を置いていないのであるから、その住民にはほどほどのことしかしてこなかったわけである。いや、人命軽視の傾向さえあったことは、しばらく前に起った交通殺人事件に対する無罪判決が、そのことを良く示している。アメリカがこのような支配者としての態度で臨めば臨むほど、沖縄の一般の人達は本国への早期復帰を望むことになるわけだ。農民の生活を見ても、給与所得者の暮らしを見ても、アメリカの援助で年々良くなってきているといった様子は少しも見られない。かえって、就職難で悩んでいるような状況であり、暮らしの向上を本土政府に大いに期待しているようだ。しかし、基地が沖縄の命であったことは疑いない。そこに沖縄の特徴があるわけであり、様々な悩み、苦しみもあるわけである。

東南アジアの現状に立ちて

ここで、誰にでも印象づけられるこれら外面の現象に、内在している或る課題に少しばかり留意しなければならないであろう。

沖縄は日本でなくされていた。その歳月は四分の一世紀にもわたって、完全にアメリカの一部になっていた。アメリカは軍事的にはもとより、法的な正当性の上に立って主権の行使を続け、自国領土以外のなにものでもないという沖縄にしてきた。ここに、その住民は直ちに日本人と呼ばれず、沖縄人と呼ばれてきた日本自身の悲劇を見る訳である。それは明らかに植民的呼び方と言わなければならないからである。日本内地と沖縄との社会的、生活的、そして意識的な切断。この断層の上に立って沖縄の人々は日本内地人の無理解と違和感を抱いてきた訳である。その沖縄の植民地性格の典型的な一面は、外でもない円貨の完全廃止にあったと言えよう。貨幣はおよそ国民の生活において、最濃度の意識性を作り、その支配力は弱き者ほど強く受けるのである。そのよい例として、すでに述べてきたように、久しい植民地政策下に生きてきたフィリピンがあるだろう。従って、円をドルに換えさせたということは日本人的生活感覚と様式とを、根底から切り崩して、アメリカ的生活ムードに順応させたという、かつてのフィリピンにおいて、その露骨な例を見ることができよう。そのため琉球政府は通貨と物資の流通の上に、あらゆる制限を受けてきたことは、既に周知の通りであり、日本内地との交通も、厳しい統制下に置かれていたのである。このような状態が26年間も続いてきたということは、既に一連の歴史なのであり、そのため沖縄の人達の精神構造においてもかなりの変化を見てしまったということは、当然考えられるわけであるし、また考えねばならぬ点であろう。それは単にアメリカナイズされた日本人というだけの表面的な、また言葉上のことではなく、もっと深い人間社会底辺の在り方において、このように言うことができよう。彼らは弱者として、宿命的にそのようにさせられたのであり、そこにこそ目を向けて見るべき大きな問題がある。日本の文化からの疎外、もっと端的に言えば日本そのものからの断絶が行なわれてきたわけであって、アメリカのための、アメリカによる、アメリカ政策から、沖縄人という独特なパターンができ上がってきたと言っても、決して過言

東南アジアの現状に立ちて

ではないだろう。もちろんこれは意識生態の上でのことであって、表面的にその姿を映すとき、日本人であることに変わりを見せている訳ではない。しかし表面的な視野よりも、意識の内面の方が、極めて主体的な社会課題なのであり、また民族文化の決定条件でもあろう。私のこうした角度観であるが、72年の本土復帰確定を目前にして、改めて日本に迎える沖縄を思うからである。最近いろいろな雑誌に「沖縄独立論」が散見しているが、それもこのような日本本土との意識差から来ている距離感の故だと思う。単にドルショックで混乱するとか、ドルを円に切り換える経済の変質問題だけが理由では決してないはずだ。私も沖縄を見、沖縄の人と話し合っ、その或る深さに触れた時、日本の一部と言いながら、日本であると言うよりは、質的に異国といった感じの方が強かった。それは私自身がドルを使わなければならなかったからではない。沖縄においてはなにか別の感覚が迫ってきて、そのため意識の或る断絶を感じたからである。彼らは本土復帰に当って、それは喜びでもあるが、また同時に生活意識の二重性にとまどっていることだろう。経済的な不安もあろうが、大きな理由は日本に対する自分達の盲点や空白感のため、高度に発達した本土の文明と文化の社会へ、どれほど溶け込めるであろうかという自信なり姿勢の不足によっていると思う。これが現在の沖縄の大きな問題であり、軽々しく復帰を喜ぶという風潮を、その社会の深い層に見ることはできないようである。今後の接触課題としては、やはり良識ある人事の交流であり、それは特に文化・教育の面において主題にされるべきである。この配慮の不足、ましてや無策では、沖縄の人達はなおも続けて、日本の田舎者としての劣等感に悩み（現在あらゆる面を総合すれば、日本より20年ぐらい遅れていると評価できる）、大きな社会問題にもなりかねない。この復帰をめぐる、できるだけ早いうちに打つべき手を打つ必要があるというのが私の実感であった。沖縄の問題は山積している。と言っても、表面に現われた当面の処理問題にのみ注意を払っているだけで、沖縄人としての問題解決になるとしたら、それこそとんだ手落ちになる。しかし、いかなる問題にもせよ、本土の人達が真実な配慮と、暖かい握手の手を差し伸べる必要があること、そしてそれはどれほど必要で

あるか分らないのだ。

5. 東南アジアと日本の役割

最近、次第に政治的、経済的発展と自立力が目立ってきたとは言え、東南アジア諸国に共通して言えることは、政治、経済、社会の諸々の面で、まだまだ後進的であり、不安定そのもので、他国、特に日本やアメリカからの援助がない限りは、その自立への約束を自ら作り出し得ないといった現状と言はねばならない。従って、東南アジア諸国の共通した願望は、経済に余力を持ちたいことであり、社会に安定勢力を作りたいこと、言葉を換えて言えば、社会生活において生産と消費との均衡、生活民度の上昇、つまりその国民エネルギーによって実質的な自主独立への悲願を内蔵していることである。やはりなんと言っても、これがその国々に見る緊張の焦点であると言えるのだ。

世界の角度から見ても、この群を抜いた経済力を持っている日本は、全アジアにわたって、強い安定勢力を成しているであろう。今や、ドルの保有高が世界第二位であるとすれば、既に経済大国の名で呼び得よう。そして東南アジア諸国への日本企業の進出の著るしきは、目に焼きつくほどに見て来た私である。だが、これらの国々に、日本の経済力に対して今後一層の援助を期待しながらも、不安や警戒心があることも事実である。日本は確かにこれまで利潤追求のためにのみ、東南アジア諸国を利用してきた。援助と言っても紐つきであったことは明らかである。そこで、今後はこのようなことは止めて、周囲の国の発展に大いに貢献すべきである。

経済的大国としての日本は大局的な立場に立って、各国の発展に寄与することであり、民族の独立が早期に達成できるように様々な援助を行うことである。東南アジア、広く、アジアの発展は世界平和に結びつくということを考え、行動することが大切である。そして日本を含めた共存共栄の道が開けるよう各国の橋わたしをする必要がある。

繰り返えすようだが、日本がアジア諸国に果たす役割は大きい。それは、なによ

東南アジアの現状に立ちて

りも日本がアジアの一員であるからだ。各国に見られるナショナリズムは今後ますます盛んになっていくであろう。このことを十分認識した上で、問題に取り組まなければならない。言い換えれば、民族意識、民族の独自性、自主独立の気運などを盛り上げるようにしながら、援助の手を差し伸べることである。その方法として、各国の資本に主体性を持たせること、あらゆる面の技術水準の向上に力を貸す（財政援助や技術援助）ことなどが考えられる。細心の注意と、忍耐強い努力があるであろうが、これまでの日本に対する概念を払拭し、アジアの信頼を得ることは、日本の基盤をゆるぎないものとする最も重要なことである。早急に手を打っていかなければ、日本はエコノミック・アニマルとして世界中から嫌われ、ボイコットされて、世界の孤児になってしまうであろう。

6. む す び

最後に、既に触れたこと以外のごく一般的なフィリピン・台湾・沖縄の現状と問題点に触れて終りにしたい。

フィリピン共和国は大小無数の島（7,109個）から成っており、人種の複雑さ、統治の難かしさ、ジャングルにおおわれた未開地の多いこと、交通機関の遅れ、通信機関の未発達など、多くの難問を抱えているのが現状である。最近、新聞・テレビを賑わした石器時代そのままの人種——タサダイ（Tasadey）——が発見されたことなど、いかに文明が行きわたっていないかを示す恰格の例であろう。今後ますます教育の普及をはからなければならないし、国民（主として農民）の生活向上・安定に努めなければならない。思いきった改革も必要だと思われるが、フィリピン政府も着々と手を打っていることは間違いない。ともかく、この国は国内問題を山ほども抱えており、その解決に追われているといった状態であるが、このことは東南アジア各国に共通したことでもある。

台湾経済の大きな柱の一つに、観光が入るのではなかろうか。国が軍事体制にありながら、繁華街には宝石店が軒を並べ、中国人街と呼ばれるお土産専門店が並ぶ場所では、ほとんどが宝石類を売っている。あらゆる贅沢が抑えられ、国防

東南アジアの現状に立ちて

に向けられているのであるから、矛盾するわけであるが、国内向けではなく、観光客に対するお土産、つまり国家の重要な収入源というわけである。赤線地帯の存在や売春婦の横行も、このことを裏づけるものと言えるだろう。名所旧跡の整美、料金の高さ（その実見るものはほとんどでない）など、観光収入が国家にとって、大きな財政的寄り所となっていることは疑いない。言うなれば、台湾全体が観光国なのである。

このように観光に頼らなければならないところに問題がある。現在アメリカや日本の援助はかなりのものがあるだろう。ニクソンの訪中間問題をきっかけにして起っている中国と台湾の問題で、もし、中国の内政問題として介入を控えるようなことになれば（現在日本の大企業がどんどん中国に眼を向けていることは、あまりにも企業のエゴむき出しといった感がするが）、台湾は大きな打撃を受けるであろう。それは政治的な面ばかりでなく、経済的な面においてもだ。台湾の犠牲をできるだけ少なくするよう、アジア、しいては世界の国々が心がけるべきである。

復帰を目前にした沖縄のドルショックは想像するにはあまりある。台風銀座と言われるくらい、いつも台風で苦しめられ、今年は更に異常干ばつで苦しめられた沖縄は、突然起ったドル問題で、苦しみから抜け出すことができないように運命づけられているような気がする。島を巡って感ぜられることは、主たる産物が砂糖キビとパイであるということだ。これでは沖縄の財政が良いはずがない。大部分をアメリカの援助に頼っていることは、沖縄にとってはどうしても仕方のないことなのである。それにもかかわらず、多数の人々が早期復帰を希望するわけは、たとえそのためある程度の犠牲を払うことになっても、アメリカの支配から早く逃がれたいというのが本心である。しかし、問題は受け入れる側、本土の態勢である。私はこの方に実に不安を感じる。はたしてアメリカ並の援助をしてやれるのだろうか。また、先にも述べた通り、26年の長きにわたる異国の支配、地理的条件、自然環境などから、沖縄の政治、経済機構は本土とはかなり異質のものになっていると思われるし、人々の生活様式も意識面も、かなり異質のものになっているであろう。このようなことを、どうやってうまく融合させるのであろう

東南アジアの現状に立ちて

うか。これらがいい加減に処理されれば、沖縄の人々は大変不幸になり、復帰などしなければよかったと言うことになる。また、沖縄出身者で本土にいる人や、本土に行ったことのある人は、口々に本土の冷たさを訴える。彼らはかなりの差別待遇があると言っている。沖縄は本土の身代りになったと言えないだろうか。実はそう言えるし、そう言うべきだと私は思って来た。ここでわれわれはもう一度沖縄の問題を深い角度からじっくりと考える必要と責任があるであろう。沖縄国建設などという声も、人々の口から洩れている。また、沖縄の社会主義化要求の声も運動も、私の見聞の一つになっている。左傾偏向の行き方などが、日の目を見るなどとは、あまりにも現実観不足のことと思うのであるが、少なくともそうした動きの底に潜む或る一点には、日本本土に対する異質感や違和感があったのであろう。この根の深さを、私は重視しているのである。

このたびは短い旅であったが、実に貴重な体験をしてきたと思う。今でも様々な状況がはっきりと心に浮んでくる程である。今後は更に他の国々に足を伸ばし、調査研究したいという私の切望、それは一つ一つこれら発展途上の国々に見る一歩前進の姿を私の目の楽しみにしたいからである。

1971年9月15日